

熊本地震では、大野城市から延べ60人を超える職員を被災地に派遣しました。今回は、派遣職員が見た被災地の現状を振り返り、その経験を大野城市でどのように活かしていくか報告します。

## 熊本地震被災地派遣職員レポート

## 村崎健助（福祉課）

熊本地震が発生したとき、私は市役所で業務をしており、テレビに映るふるさとの惨劇を目にし、大きなショックを受けました。

当時、安全安心課に所属し、被災地派遣の業務や支援助物資輸送の業務などにあたっていました。職場の仲間が、私が熊本出身であるという



建物への立ち入り危険を知らせる貼り紙

ことをくんでくれ、被災地派遣が決定しました。

地震発生から2週間後、避難所運営のため菊池市、1カ月後に益城町へ派遣されました。

私が派遣された避難所は、家が全壊、半壊した人ばかりが避難しているところでした。そこで、一人のおばあさんに出会いました。そのおばあさんは一人暮らしで家は全壊し、地震の際に倒れたたんに身に身体を挟まれ怪我もしていました。「私には帰るところが無くなったよ。でもね、生きていればこそなんだよ。」と笑顔で私に話してくれるその姿に、胸を打たれました。

派遣最終日、おばあさんはぼろぼろと涙をこぼして「遠いところから来てくれてありがとうね。」「あなたも元気でおらないかなばい。」と言ってくれました。

時が経てば災害の記憶も薄れていきます。被災地では今も多くの人々



避難所の様子

が仮設住宅で暮らしています。私は被災地のほんの一部しか見ていません。被災された皆さんは、私が知らない想像を絶する経験をしているのだと思います。

私は「生きていればこそ」というおばあさんの言葉を忘れず、災害が起これば必ず生きるという覚悟を持って、日々備えながら生活しています。

## 小野春奈（すこやか長寿課）

地震発生10日後から、私は管理栄養士として、熊本市、大津町、益城町などで栄養支援活動を行いました。

避難所の責任者や避難者から現状や困り事を聞き取り、食事と衛生管理の状況や栄養面から配慮が必要なる人の調査などを行いました。



給水の様子

支援活動中には、自らの力で苦難を乗り越えようとしているたくさんの方の地域の人に出会いました。支給食料の不足を地域の炊き出しで補ったり、毎日同じ時間に集まって、普段の健康教室でしていた体操を行ったりしていました。避難できずに自宅にとどまっている高齢者の見回りも自主的にしていて、自分ができることをそれぞれが担い、支え合っている様子が伝わり感銘を受けました。

日頃の地域のつながりが非常時に支え合う大きな力になることをその姿から教えてもらいました。そのことを糧に、市と地域の間で信頼関係を築きながら、地域づくりに力を注いでいきたいと思っています。

今回は、5月15日号で、「平成29年7月九州北部豪雨」を振り返ります。